

学校安全シンポジウム2019 (2)
教師教育における学校安全の充実
—東日本大震災の教訓を生かした防災教育を中心に—

麦倉 哲*, 加藤 孔子**, 鈴木 久米男*
(2020年2月21日受理)

Tetsu Mugikura, Kouko Kato, Kumeo Suzuki

School Safety Symposium 2019 (2)

Enhancing School Safety in Teacher Education

-Focusing on Disaster Prevention Education Using Lessons Learned from the Great East Japan Earthquake-

1 シンポジウムの趣旨説明

シンポジウムは、①文部科学省総合教育政策局安全教育調査官森本晋也、②岩手県教育委員会学校教育課首席指導主事兼義務教育課長小野寺哲男、③宮城県名取市立みどり台中学校長平塚真一郎と、④岩手大学教育学部教授麦倉哲の4名をシンポジストとし、コーディネーターは岩手大学教員養成支援センター特命教授加藤孔子が務めた。

最初に、コーディネーターが本シンポジウムの趣旨について説明した。

本日のシンポジウムのテーマは「教師教育における学校安全の充実」である。基調報告にあったように、学校安全学は、学校事故や事件、自然災害など広範囲にわたるものであるが、本日のシンポジウムは、「東日本大震災の教訓を生かした防災教育を中心に」ということで進めていく。

東日本大震災から8年8か月が経とうとしている今、学校では震災後生まれの子どもたちがすでに小学校2年生になっている。当然のことながら震災の記憶のない子どもたちがこれからますます増えていく。学校の教職員も震災当時の先生方は

すでにほとんどが異動しており、震災当時の学校や地域の状況を知らないメンバーとなっている学校も少なくない。

未来を担う子どもたちを育む学校および教師は、子どもたちを守るために、教師として何を学び、どう生かしていくか。学校は、教師は、どうあるべきか。

あの日、あの時をそれぞれの場所で、勤務地で、震災を経験された4人のシンポジストの皆様から次の2点についてお聞きしたい。

1点目は、＜東日本大震災からのこの8年間の歩み＞について、震災発災直後の状況や、この8年間のそれぞれの教育や活動に流れている思いを語っていただきたい。

2点目は、＜これからの学校の防災教育、復興教育、そして学校安全学はどうあればよいのか＞について、そして最後に「子どもを守る学校、教員に」ということで、メッセージをいただければと考えている。

* 岩手大学教育学部教授, ** 岩手大学教育学部特命教授

2 大震災から8年間の歩み

〈東日本大震災からのこの8年間の歩み〉

まず、シンポジストの岩手県教育委員会学校教育課小野寺哲男義務教育課長が、東日本大震災発災直後の岩手県教育委員会での状況、震災直後の被災地の状況、沿岸部の学校や子供たちの状況、その後から岩手の復興教育を立ち上げていく過程について話した。

(1) 小野寺哲男義務教育課長の歩み

岩手県教育委員会としては発災直後に、①情報収集、②対策会議、③学校再開への支援の三本柱を立てた。しかし、電話、電気が使えないためほとんど情報収集できなかったことから、対策会議において現地派遣により情報収集することが決まった。現地へ向かう際の配慮事項として、岩手・宮城内陸地震の際に、現地への道路は緊急車両の証明書を持っていないと通れなかったという教訓を生かし、緊急車両証明書や県の腕章、ヘルメット等全部整えて出かけた。3月13日現地へ向かう際、おかげで各地の検問を通過することができ、安否確認ができた。

現地での情報収集について、陸前高田市から洋野町を県教委の職員が手分けして回った。自分の担当は、釜石市、大槌町であった。被災2日後の状況を見たときには本当にショックだった。寒い日だった。大槌町では火災が発生していた。

3月末、何とか卒業式を、ということで各学校が工夫して避難所の中で卒業式を行ったり、校舎の前で青空卒業式を行ったり、中には避難所をめぐって生徒1人ずつに卒業証書を渡して歩いた学校もあった。

釜石市、大槌町を回ったときに各学校は避難所となっていた。中には、わが子の安否が未確認のまま避難所対応をされていた先生もいた。

沿岸部の教育委員会から、「児童生徒の転出入について、書類がなくても受け入れてくれるように」「先生方の人事異動を何とか弾力的にお願いしたい」という要望を受け、その後、岩手県では沿岸部のみ人事凍結という独自の異動方針を策定

した。また、3月末には『学校再開に向けたガイドライン』を作成・発行した。この状況の中、子ども達が健全に安心して暮らせるにはどうするかを熟慮した結果だった。それには学校を再開するしかなかった。青空学校でもいい、大事なことは子ども達が集まって、「元気だな、よし、ではさようなら」でもいいから生活にリズムを作ることだった。避難所の内外には、子ども達に見せたい景色と見せたくない景色があった。学校を動かすことが子ども達のためにもなるし、地域の元気にもなる、親の元気にもなる、というような発想だった。『学校再開に向けたガイドライン』はそんな願いから、学校体制などについて半月で何とか仕上げたものであった。

また、その直後から、現在につながる『復興教育』のプログラム構築へと進んでいった。被災したが、苦しみを苦しみとしてだけではなく、何か教訓として残すものはないだろうかと考えた言葉が『復興教育』という言葉である。5月の連休明けには原案を作成した。この原案について、校長研修講座を含む各研修講座で『復興教育』プログラムとして説明した。研修講座での意見等を受け、修正を加え、翌年2月に発行した。

新学期が始まった後、状況把握や教育委員による激励のため各地を訪問した。吉里吉里小学校の体育館ではパーティーで仕切った空間で大槌北小、安渡小、赤浜小の3校の子ども達が学んでいた。子ども達はこのような環境でも学校がある、勉強できるという喜びを感じていた。児童会が考え、体育館に掲示してある言葉「生かされた命を大切に一日一日をしっかりと歩む」、何と重い言葉であろうか。

2012（平成24）年度には、復興教育プログラム改訂版を作成した。ここで整理したのが【いきる・かかわる・そなえる】という教育的価値である。この3つを何とか県内に広げていき、岩手の子ども達をよりたくましく育てていこうと考えた。

2013（平成25）年度、私が赴任した厨川中学校での復興教育を紹介する。【いきる・かかわる・そなえる】の特に【かかわる】について、通常の

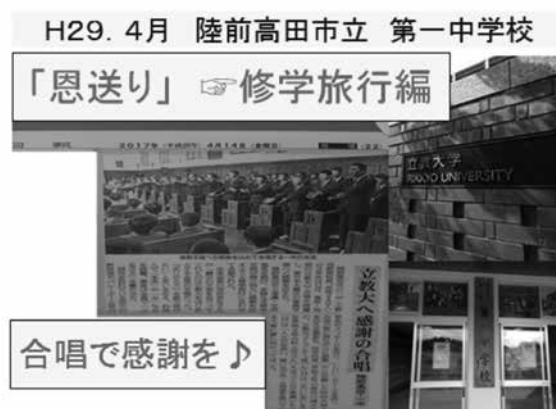


スライド 2-1 吉里吉里小体育館に3小学校

学校では教職員と保護者等、大人の参加で行われる地区懇談会に生徒も参加し、その生徒が夏祭りの企画を考え、実際に運営にもあたった。また、厨川中は震災で校舎が使えなくなった内陸の唯一の学校なのだが、そのことで陸前高田市の方とつながり、太鼓の曲を作ってもらって披露した。その年度の3.11には、追悼集会として、学校があること、全校朝会等できちんと整列ができること、こうやってみんなが集まれること等、当たり前の生活ができることに感謝し、だからやるべきことを徹底して続けていこうと子ども達に伝えた。

2015（平成27）年度から再度、学力・復興教育課長として、岩手県教育委員会に異動。「学校は子ども達の命を預かる場所」これが仕事を進めるベースである。その年度に復興教育と学校安全はどうかかわりあるのかを整理した。また、それまで岩手が行ってきた「知徳体のバランスのとれた人間形成」と「安全教育」の関係も整理した。地域との連携、協働について、ある校長は「地域とつながっていることは命がつながっていることである」と述べた。このような研修を現在も進めている。

2017（平成29）年度からは校長として陸前高田市の第一中学校に赴任した。そこで整理したのが学校経営の基盤、総合的な学習の時間の目標、学習内容、学年ごとの軸となる取組等である。子ども達の発案で防災教育キャラクターを創った。「まもるくん」と呼ぶ。支援を受けたことに対し恩返



スライド 2-2 高田一中の「恩送り」

しという言葉があるが、その人に直接返すわけではないのだから、新しい人に感謝の気持ち送ろうではないかということで、「恩送り」という言葉で行った。市民への感謝、保護者への感謝の気持ちを持ち、職員、生徒の避難所運営ゲーム（HUG）体験も取り入れた。

陸前高田市は大震災津波での被害が非常に大きく、生徒の心のサポートの関係で復興教育の「そなえる」という防災学習に手をかけられなかった。しかし、赴任した年度に先生方からの情報や生徒会活動の状況から子ども達が大丈夫だということになったので、ようやく「いきる・かかわる・そなえる」のうちの「そなえる」に少しずつ取り組み始めた。

復興教育の『いきる・かかわる・そなえる』は学校生活の中の様々な場面で指導可能な教育的価値である。例えば、昨年台風で校地内の桜の木が折れたことがあった。その翌週に全校朝会で語ったことは、「桜の木が倒れた、誰もけがなくてよかった、付近の家への被害もなくてよかった。また、すぐに教育委員会が手配してくれて、森林組合関係の方々が倒れた木の撤去や危険樹木の伐採をしてくれた。まさに『いきる・かかわる・そなえる』だねと全校朝会で伝え、日常生活における復興教育を意識させた。さらに、森本晋也先生に来ていただいて3年生対象にアーカイブ授業を行った。2年生は保護者とともに防災避難経路を歩いてみて、まとめをして、学んだことからの

気付きや提案を市の防災担当課の職員に伝える活動も行った。年度末には、防災学習ノート（「まもる君ノート」）も作成し全校生徒に配付した。新年度以降、復興教育を進める度に使うノートである。2019(平成31)年度現在は、校庭を全面使える喜びを感じている。

2019年度になり、こんな新聞記事があった。「校舎の前に校庭があることに幸せを感じている」と。なかなか中学3年生で、校庭があることに幸せなどと言わない。高田一中の生徒は、9月に東日本大震災津波伝承館(いわて TSUNAMI メモリアル)がオープンした際、また恩送りとして合唱等を披露したとのことだった。

2019(平成31、令和元)年度の研修講座では、義務教育課長として、「教員としての資質向上のためにこういう要素で頑張っていきましょう。それが元気な子たちを育てていくことにつながります」と述べた。教師も生徒も一歩ずつの成長ということである。繰り返しになるが、大前提は『命』である。そして、「大切なあの人のために自分はこの仕事をしているのだ、あなたにとっての大切な人は誰ですか」ということである。それを考えながら何のための学校であるのか、何のための授業か、マネジメントかということを考えていきたい。当たり前前に感謝し、なかなか当たり前であることには感謝できないことが多いが、ふと被害があった時に、「えっ電気がない」「あれ？電気がついた」「水がない、水がある」という当たり前を意識し、当たり前前の生活に感謝し、また当たり前を疑う。ならば、この教育活動は子ども達のためになっているのか、本当にこの学びが必要なのか、このチャンスがあったほうがいいのか、ないほうがいいのか。これにかかる時間、この時間が必要なのか、そんなことを疑いながら進めていければと思っている。このような積み重ねで、この8年間を過ごしてきたところである。

(2) 平塚真一郎校長の歩み

次に宮城県名取市立みどり台中学校平塚真一郎校長が、当時大川小学校6年生のお嬢さんを亡く

されたつらい経験からの教訓や、教師としての学校安全の取組などを話した。

(シンポジスト 平塚真一郎校長)

まずこの原稿を出した後に、実は私にかかわることで重要なことが2つあった。

1つは、先日の台風19号で50年来住んでいた家が浸水した。その後にはどうしようかと思っていたときに、ボランティア仲間が学生ボランティアとともに来てくれ、手伝ってくれて、何とか片付いた。

復興とは、元どおりに戻すことではなくて、そこから何とか頑張ろうという気持ちになるということがすごく大事だと改めて思った。人の力、人の支援というのはすごく大事だなということを変更して思っている。さきほど学生さんが発表したが、素晴らしいと思うと同時に、学生さんのそういう力が未来を変えていくのかなと思う。

そして、もう1つというのは大川小学校事故の裁判が結審したことで、そのあたりも後で触れたいと思う。

出会いは偶然ではなくて私達が選択してきた結果の必然である。私がここに立っているのは、私が今までこれまで起きたことをいろいろ選択をしてきた結果、ここにいるということ。皆さんもいろんな選択があつてここにいる。そして出会いがあつたということだ。この出会いが意味ある出会いになればいいと思う。

私の座右の銘、「人生には意味がある」これは震災後、特に私にとって非常に大切なものになった。

私は、娘を亡くしているが、皆さんの中にも震災で大切な人を亡くした方もいるかもしれない。感情的な思考の脳で考えがちだが、今日の話は分析的な思考の脳で、聞いていただきたい。

東日本大震災の特徴は、津波被害のひどさにある。特に行方不明者は2,532人に及ぶ。

私は当時、石巻中学校というところに勤めていた。石巻中は山の上に位置し山の周りが浸水したため、私の自宅には同じ市内でももちろん帰れない。それから中学校には、避難者が続々来て、

一晩で2,000か2,500人くらいと言われているのだが、その対応に追われ、4日間、自宅に帰れなかった。ラジオでは大川小学校孤立ということをやっていたので、娘は大丈夫かなと心配したが、むしろ自宅の方が(小学校よりも)危ないかなと考えていた。

結果としては大川小であれだけの事故があったわけである。その後、大須中学校というところに赴任になる。自宅から勤務先へ行く時に必ず大川小学校のところを通ることになるが、これも何か意味があることなのかなと考えた。それから、青葉中学校に赴任する。ここは大川小学校の学校事故を除くと、実はいちばん小学生、中学生が亡くなっている地域だった。そこに行った意味もいろいろ考えることになる。

74名の本当に尊い命が失われたのだが、河口から3.7キロ離れていて、誰もここに津波が来るとは思っていなかった。それまでも誰も津波を体験したことがなかった場所だった。学校の近くの診療所の3階では人が助かっている。しかし、大川小学校は当時非常にモダンなデザインの建物で、2階までしかなかったもので、それも不運の一つであった。私の娘は、震災から5カ月後、海で発見される。名前を平塚小晴という。生きていれば今年の正月に成人式を迎えるはずだったので、もしかしてこちらの大学にお世話になっていたかもしれない。生きていればである。中学校、高校、そこでいろんな活動をしたりいろいろ悩んだり、それから恋もしたかもしれない。また別な人生があったかもしれないけれども、私の娘は12歳、4,492日という月日を駆け抜けてこの世を去った。下に2人弟妹がいて、本当に弟妹思いの、人の喜びを自分の喜びに変えられる、そんな子だった。

今回の台風でも何名亡くなったと数字では見るが、たとえば大川小は74名だけれど、74分の1ではなくて、一人ひとりが家族にとってはかけがえない本当に大切な命であり、大きな命である。そこには生きてきた歴史があるということをぜひ忘れないでほしい。

学校に行って目の前の児童や生徒に接する時も

同じ、その子達にもそういう歴史があるということ、これは忘れないでほしい。私の妻はちょうど育休をとっていた。私は仕事があるので、行く車の中で泣いて、しかし学校で生徒の前に立つ時は、何があるかと笑顔で立とうということは決めていたので、そういうふうな教師生活だった。私の妻は自分で重機の資格を取って、行方不明の子どもを探すことで、捜索活動に加わることになる。もう8年8カ月だが、実はいまだにわが子を探している遺族がいる。それが災害だ。

大川小事故検証報告書の第1番目の提言というのが教職課程の防災学習の位置づけである。その報告書からわかることは本当に救えた命だったということだ。どのような形であれ命が助かっているならば、「どんなにか生きていくということは素晴らしいか」ということだ。

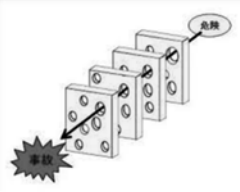
大川小事故に関しては、学校の教員の立場として非常に厳しい判決が出た。学校防災の在り方について問われている。これを受けて、今後いろいろ変わってくると思う。

保護者にとっては、とにかくわが子が命を落としたこと、それが全てである。それから、教職員としては、先生方も一生懸命やったのではないかということである。裁判は結審したけれど、遺族の気持ちは晴れるかというところではないと思うし、裁判が命を守ってくれるわけではないので、これからが多分大事なのだと思う。

私が今こういう話をしているのは、実は同じ大川小遺族でお孫さんを亡くされた方が「何で先生、大川小学校が全国で注目されたのに、洪水とかで人死ぬんだべね」と言われたことがきっかけである。それは多分大川小学校で起きたのことは伝わっているかもしれないけれど、大川小学校で起きたことから得られた教訓が伝えられていないのではないかと考えている。大切なことは、自分ごととして捉えること。それから、どう意識を改革していくか、特に学校の意識を変えていくかということはずごく大事だと思っている。

風化させないということはそのものを忘れないことではなく、そこから見出されたものを伝えて

【スイスチーズモデル】
 事故発生のメカニズムを説明するものとしてよく使われる言葉。
 スライスしたチーズの穴が繋がらないようにする、つまり事故を防ぐためには、チーズの枚数を増やすようにしなければならない。
チーズ=安全対策（防壁）



スライド 2-3 スイスチーズモデル

いくということだと思う。

「スイスチーズ・モデル」というのがこの大川小事故検証委員会の中で話された。チーズをスライスしたものが安全壁、防壁で、安全対策である。しかしスイスチーズには穴がある。これがたまたま重なって、この穴が貫通した時に事故は起きるというモデルである。ではこのチーズをどれだけ多くするかということが課題となる。それがもしかして防災教育かもしれないし、それが教職員の意識かもしれないし、それは学校の態勢かもしれないし、マニュアルかもしれない。それは多ければ多いほどよいということである。

なぜ防災がともするとないがしろにされるかというと、いつ起こるかかわからない、何が正しいかわからないからである。備えることが高いレベルで当たり前でなければならない、そういう時代に入ってきた。

大切なことは、とにかく命を守ることが何をおいても最優先することである。後から大丈夫だったのではないかとされたとしてもよい、命さえあれば。これが究極の教訓です。

それから、人間というのは判断する時にいろいろなバイアスがあるということも考えなければならない。

WMO（世界気象機関）がこの夏発表した通り、現在、おそらく地球は活動期にある。そういう中でこれから起こる自然災害は想定外だと考えた方がよい。とすれば、これまで私たちや私たちの祖先がつくってきたものは、もう当てはまらない時代にきている。従来のものをアップデートするこ

とも大事だけれど、アップデートだけでなく、それにとらわれずに、若い学生の皆さんの頭でどうしたら未来の命を守れるのかということを考えてほしい。皆さんの学びが未来の命を救うことになるのかもしれないということを思い、学んでほしい。

赴任した学校はどうか、もしかしたら皆さんが思い描く学校ではないかもしれないけれども、そこで皆さんがどう動くか、人間力が問われる部分があるかもしれない。だから、防災をはじめとする学びも必要なだけけれども、やっぱり人間力を磨いていかなければならない。

(3) 学校安全調査官森本晋也の歩み

次に文部科学省・森本晋也学校安全調査官は、釜石東中の時にいろいろと防災教育をされたこと、そして岩手の復興教育の立ち上げたことについて話した。

（シンポジスト 森本 晋也調査官）

私は、震災の前年度まで釜石東中学校に勤めていて、震災のときには一関市の教育委員会に勤務し、3月11日は教育事務所の会議が一関の合同庁舎であり、まさに会議中にあの大きな揺れがあった。当然私たちも机の下に入ったわけだが、もうご存じのように大きな揺れが長く続いて、すぐに停電にもなり、私はもう「ああ」と頭に浮んだ。これは津波が来るのではないか。教育委員会の職員として、そのときは一関市内の小学校、中学校を回って、でも情報網が全部止まっているので、子どもたちの安否確認、学校の状況を把握するというので、私は大東担当だったので、旧大東町に向かったのを今でも覚えている。ラジオから大津波警報という言葉聞いた時にもう本当に足が震えるような感じで、先生や生徒たちは避難できたのだろうかとても心配した。教育委員会の対応をしながら、そのうちラジオで夜生徒たちが助かっていたということがわかって、避難していたということがわかってきて、少し安堵したというのを今でも覚えている。

私が震災前に勤めていた釜石東中学校の発災直

後の映像。釜石東中学校と隣接の鶴住居小学校の先生がたや子どもたちは高台に避難したわけだが、このときの副校長先生はもう本当に机の下にいて身を守りながら、その後すぐ「しまった」と思ったそうです。「校長先生が出張で出かけた。これは私が覚悟を決めて避難誘導しなければいけないと思った」と話していた。放送をかけようと思ったらもう放送は使えなかった。そういう状況の中で、校庭は野球場もあってサッカー・グラウンドもあって、放課後てんでんばらばらの状態でありながらも、子どもたちは声をかけ合って集まってきたという。

後に私は、当時の様子を生徒から聞いた。ある生徒は体育館にいて、外へ出ようとする時に物を持つとした。その時に「いや、もう荷物なんか持つんじゃない。これは学習した知恵が働きました」という生徒もいた。中には「実は先生、いろんなことを学習していたけれど、頭が真っ白でした。パニックでした。でも、気がついたら走っていました。高台に向かっていました。体は覚えていたんです。先生、だから訓練って大事なんです」と言ってくれる生徒もいた。

当時の副校長先生は、集まってきた生徒たちへ本当であれば点呼をとってから高台に上げるということになっていたのだが、マニュアルを守らず、来た生徒たち、先生たちから高台に行けというふうに指示を出した。私はそのことがずっと気になっていたので、当時の先生にもう一度取材に行った。「なぜそう判断したのですか」と聞いたところ、「逆算した」と述べた。「この地域にはどれぐらいで来るから、もう既に何分たっている。ここで点呼をとって、ここでこうしていたら避難が間に合わないかもしれないと判断して、点呼はとらずに高台に行けと言った。それは子どもたちとともに学習していたことが生きた」というふうに述べた。そうして第1次避難場所に着くと、そこで崖崩れが起きているから第2避難場所に移動したというのがこのときの様子だった。

そして、さらに第2避難場所に副校長とみんなが上がるというときに津波が来たという。「もう



スライド 2-4 第二避難所からさらに高い台へ

まるで映画のワンシーンを見ているようだ」というふうに当時の生徒は言っていた。中にはこういう生徒もいた。「ここまでちょうど上がってきたところを自分よりも後ろに来ているはずの3年生が、自分たちを追い抜いて、さらに高台まで走っている。何事かと思って見たら津波が来ていて、そしてそこに保育園の先生とかがいた。当時釜石東中学校では自分の命は自分で守る、てんでんばらばらになっても逃げるということも学習していたのだが、中学生が助けられる人がいるのも学んでいた。その子は頭の中で一瞬考えて、「今なら下におりても間に合うと思って下におりた」と言っていた。そして、下にちょっとおりて、「この子を貸してください」と言って、保育園の先生から一人でも園児を抱えて、さらに高台に上がった。この急勾配の坂をと思ったときに知り合いのお父さんがいた。この子には力のある男の人に委ねたほうが助かると思って、「この子をお願いします」と委ねて、自分は自分でさらに山の中に逃げて高台に避難したという。「よく判断できたね」と言ったら、「津波てんでんこを学習していたので、それが私の判断基準でした」と話してくれた。震災前に釜石東中学校は「自分の命は自分で守る、助けられる人から助ける人」で学習していた。その後、災害を経験した子どもたちに何が大事だったかということインタビューして明らかになったことは、まずは子どもたちが津波の危険は自分に来るかもしれない、人ごとではないと考

えていたことだ。例えば地域を歩いていて、ここまで来たらどうなるというふうに思ったとか、いざれ人ごとではないと思っていた。何のために学習しているかということがわかっていて。大きなキーワードは、みんなの命が助かる。何人もの生徒に言われたのだが、地域の人たちの命が助かるためにはというのがあったということだった。あと、家族と話し合う。フィールドワークに行くと、ある生徒は地域の人に「てんでんこ。いざとなったら家族が心配でも戻ってはいけない、警報が発表になっているときに戻ってはいけない」と言われて、その子はなぜ大事な家族がいるのに戻ってはいけないのだろうと考え、友達とどうしたらいいか2人で考えて考えて、そうだと家族で話し合っていて、それぞれみんながしっかり命を守るようにすればいいのだということで、家族を集めて、家からの避難経路を確認して、もしも自分が学校にいるときに津波警報が出たらどうするかというのを話し合ったそうだ。その時にその子は「お父さんはお父さんで逃げてね。お母さんはお母さんで逃げて。私は私で逃げるから絶対に迎えに来ないで」と考えていた。その父親は震災の時、釜石市の町の方から家族のところに行こうと思ったが、その娘の言葉で思いとどまったと言っていた。家族で話し合うことの大切さや地域の人たちとのつながり、地域に行って防災活動をするための大切さを再確認した。

例えば、これはちょうど岩手大学を今年卒業して、初任者として釜石市に赴任した卒業生が言っていたのですが、「いや先生、地域に行って安否札を配ったり防災活動をやっていた。そのときに、実はあのとき中学生ながら私も地域のために役に立つんだ、役に立つことを実感できた。もっとやっていきたいとあのとき思いながら防災教育を受けていました」という話をして、ある意味地域と連携することの意味、地域の人たちから「いいことやっているね」と言われて、さらにもっと学習していきたいという意欲をもっていたということも明らかになった。

避難訓練のように学習を繰り返しやっていく。

震災前の釜石東中学校の取組

【防災教育のねらい】(2009年度～2010年度)

1. 自分の命を自分で守る
～津波・地震の知識を身につけ、避難できる生徒の育成～
2. 助けられる人から助ける人へ
～家族・地域社会の一員としての自覚を高め、行動できる生徒の育成～
3. 防災文化の継承
～防災文化の継承者の育成～

【ねらいを達成するために】

1. 津波を知る、避難方法を知る、地域を知る。(知識・理解)
2. 日常生活においても、考え、判断する。(思考・判断)
3. 避難訓練や防災ボランティアにおいて実践する。(行動)

スライド 2-5 釜石東中学校の取組

そして、何よりもそのためには先生が熱意をもってやっていたということも実はインタビューから出てきたことである。私たち教師自身がどういう姿勢でやっていくのか、さきほど学生からの発表にあったが、子どもを主体とするためには私たち教師が必要性的もったり、そして思いをもってやっているということも大事だということがわかってきた。

その後、岩手県の教育委員会で「復興教育」に携わったのだが、やはり、釜石での経験を踏まえて被災地のボランティア活動であったり、県の総合防災訓練に初めて学校と家庭を巻き込むということを行った。それまでは公的な訓練は高齢者の人と関係機関の人ばかりだったりするのだが、この時に小学生や中学生、そして保護者の人たちも参加するということができたというのがあった。

そして、岩手大学では、授業に携わらせていただいた。学部の人に岩手の復興教育を受けた学生が教職大学院に進学し、さらに復興教育や学校安全を学んでいくという学生もいて、自分自身たくさん経験をさせていただいた。

(4) 岩手大学麦倉哲の歩み

最後に岩手大学麦倉哲は、震災後の調査研究活動の結果や、そうした活動から教訓としたいことを話した。

私は専攻が社会学であり、震災が起きてからさまざま調査を実施し、フィールドワークに取り

組んできた。共同研究者や学生たち、大学院生たちと一緒に、避難所調査、仮設住宅調査、公営住宅調査、被災状況調査、死亡状況調査、避難行動、久慈市で民生委員調査、生きた証を残す調査、そして心の復興サロンなどをやってきた。今日は、これまでの聞き取りや様々な調査から4つの小学校と地域社会との連携について話す。

仮設住宅住民調査で被災者が何を大事にしているかを聞いた結果、注目されたのは「犠牲となった方々への鎮魂・慰霊」である。犠牲となった命と向き合い悲しみつつ、故人を思い忘れずに語り継いでいこうということである。また被災者は、防災文化を受け継ぐということをとっても重視している。おそらくこれは三陸の他の地区でも同様と思われる。震災で家族を亡くした人がたくさんいる。そうした遺族には様々な人が寄り添う、ともに考える「公共圏」が成立してきたといえる。

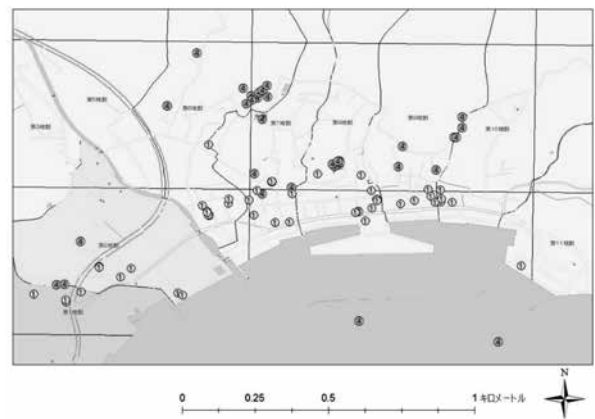
学校と地域社会におけるさまざまな活動力を考える指標としては、開設された避難所の中に、民有地、神社仏閣、民家等が少なくなかった。大槌町では、約半分ぐらいが公共施設でないところで避難所などが運営された。こうした場面で、後で述べるように「学校の力」と「地域の力」と「科学の力」の3つの力がいかに連動し、いかに発揮されるかが注目点である。

ケースの1つ目は、山田町の大沢小学校である。この地域では約100の方が亡くなった。他方で、小学生の被災はゼロであった。この地域の特徴は、地域と学校がその基盤となって「海よ光れ」という全校表現劇を毎年学習発表会として行ってきた点に象徴される。劇の中で、小学校と地域社会の関りが浮かび上がり、この地域の漁業の特徴や過去の津波災害の様子を取り入れたシーンも盛り込まれている。

今後の防災について、山田町仮設住宅調査の結果では、①「学校と地域が連携した避難訓練」、②「学校での防災教育」、そして③「自分で逃げる」が上位を占めている。学校と地域の連携が重要であることは、地域の人たちの意識に根付いている。他方で、公の脆弱性ということ言うと、津波防

災マップからうかがえる。山田湾は、湾口が狭く湾内が広い。侵入した津波は広い湾内に広がるので、岸に到達する津波の高さは、非常に大きなものにはならない。4メートルの防潮堤でも津波被害はほとんどないというのがマップで示された想定である。大沢地区の地図を見ると、港湾に比較的近いところに消防団の屯所がある。しかし実際は、津波は屯所を越え、高台にある地区の公民館であるふるさとセンターの近くにまで押し寄せてきた。住民の避難行動調査では、①は地震が発生した時、②は10分後、海に行った人もいる。③は20分後、④は津波が到来した時である。

避難行動調査からは、津波が来た時に地域住民



スライド2-6 大沢地区の避難行動
(①が地震時、④が津波到来時)

がどこに向かったかがわかる。標高15メートルのところに公民館（ふるさとセンター）と25メートルの大沢小学校である。地区内の小学校があることがいかに重要かがわかる。このようなことで地区公民館である「ふるさとセンター」と、小学校が発災直後の避難拠点になったことは、避難行動調査における①と④の地点を比較するとわかりやすい。⑤はその日の夕方、⑥はその晩にいたところである。その晩は、公民館と小学校、船を守るために船を操縦し港湾に出ている人がいることもわかる。地域と小学校の連携がとても強いということがうかがえる。

それだけではなくて、小学校の佐藤はるみ先生は6年生に呼びかけて、地域を元気づけるポス

ターをつくり、がれきの中に残った電柱に貼った。また被災から1週間もたたないうちに、学校新聞(個人新聞)も作り、小学校避難所避難者や地区の人びとに配付した。記事の大見出しには「この経験を未来へ」と小学校6年生が書いている。強制ではなく、書きたい人が書くようにとの呼びかけにこたえて、これだけの児童が書いたのである。大沢小学校の学校新聞「海よ光れ」の取り組みは高い評価を受け、内閣総理大臣賞も受賞した。そして全校劇「海よ光れ」は、NHKホールで上演されたこともある。



スライド2-7 大沢小生がつくったポスターと新聞

この地域の防災力の高さを物語るのは消防団の活動である。地区の分団(山田町第10分団)の屯所は被災したものの、団員は津波到達前に消防車両を高台へと避難させた。津波は地区公民館の下の所まで到達した。災害は津波だけではなく。火災が発生したのである。被災自治体で大規模な火災が起こったのは、宮城県気仙沼市と岩手県大槌町とこの山田町だと言われている。こうした中で、火災を鎮火をさせ地区内に燃え広がるのを阻止したということで山田町第10分団は注目された。消火栓は津波で被災し使用不能になったため、消防団は放水はできない状態にあった。しかしそうした中で団員は、過去の記憶をたどり古い防火水槽の位置を探り当て、そこからホースを十数本つないで消火活動を開始し、地区の火災を鎮火させた。まさに、地域の力でである。学校は地域との関りが深く、また郷土芸能の活動が小学生により担われてきた。かくしてこの地区には、独

特の虎舞が演じられている。しかしながら、このようなモデルケースの大沢小学校が、2019年度で閉校となることが決まった。

次に、大槌町吉里吉里小学校区の人々の被災状況を地図に示した。亡くなった人の行動をGIS分析で示すと、その行動の軌跡は、津波が到来した時点でとまっている。つまり犠牲となったということである。助かった人と亡くなった人の行動の差異は、それほど大きくはない。しかし結果の違いは大きい。

被災し犠牲となった人についても、いかにして避難せずに、あるいは避難したにもかかわらず、被災したのかについて究明する必要がある。被災者がある地点までたどり着いた意味を解明し、検証に付し、そこから教訓を引き出さなければならない。そのことを語り継いで継承したり、学校安全教育や防災教育などにも生かしていきたい。教員養成をする大学としては、そういった経験的な知識を備えた学生を教員として養成し世に送り出していきたい。

3 これからの学校の防災教育、復興教育、そして学校安全学はどうあればよいのか

(1) 生活安全、交通安全とも関連づける

まず、平塚校長先生が「いわての復興教育」や学校安全への提言をした。

まず、私がそもそもここにいるのはここにいらっしゃる森本先生との出会いである。森本先生と出会ったのは、大阪教育大学の安全に関する研修会でお話を聞いたというのが始まりである。そのときにやはり釜石での取組、これは非常に素晴らしいなと思っている。先程、学生さんの提言にもあったが、やっぱり主体的に子どもに取り組みせる、それは今でも私の学校防災教育のあり方としては大事にしたいと思っている。

また、子どもや教員も、どのように自分事として捉えてもらうかと考えた時に、防災を入り口とするよりも、生活安全とか身近なことを入り口にしていくということも必要なのではないかと考え

ている。

私の学校では、防災学習の日というのを毎月決めているが、そのときに防災に限らず、生活安全、交通安全を含めて、とにかく安全に関する意識をちょっと高める日にしましょうということで取り組んでいる。ちょうど新学習指導要領で今「何を教えるか」ではなくて、「何を学ばせるか」ということを目指しているが、防災も同じだと思う。

大切なことは…

事故・災害の教訓を共有する
「まさかうちの学校では…(他人事)」

↓

「もしかしたらうちの学校でも…(自分事)」

意識改革（共感）と実践（協働）
 教職員・家庭・子ども・地域の参加

スライド 2-8 災害を自分事とする

大川小事故検証報告書(24の提言)

提言3
教職員の緊急事態対応能力の育成と訓練

各学校は、教職員間のコミュニケーションを促進し、(職位、年齢、経験などにおいて)下の者から上の者への意見の表明、間違いの指摘がしやすい職場風土を醸成するとともに、上の者が必要なリーダーシップを発揮できるよう、適切な権威勾配を維持するよう努めること。

各学校は、迷ったときには子どもの命を何よりも第一に考えた選択肢を選ぶことを教職員間で申し合わせ、その旨を行動指針として折に触れ確認すること。

スライド 2-9 大川小検証報告書 (24の提言)

それから、大川小事故裁判の結果を言うと教員も大変だなと思うかもしれないけれど、安全レベルを上げることが当たり前になればいいのだと思う。確かに大変なことが増えるかもしれないけれど、教員とはやっぱり素晴らしい職業だと思う。人は人を育てることとか、自分が培ったことを人に伝えるとか、そういうことに人間はやりがいを感じる。人を育てることはすごく大切なこと。この人の言うことならわかるというような人間力のある。そういう教員になってほしいと思っている。今ここにいるという意味をぜひ考えて学んでほしい。

(2) 復興教育は沿岸のことではない

次に、小野寺課長に、これまでのシンポジストのお話をふまえた上で、岩手県の防災教育や復興教育についての課題について話していただいた。

今までお話を伺い、改めて思うことは「命」ということ。それは何にも比較対象はない。1個しかない。失わないように守り抜く、全力で。これが全然比べようなく、もう土台の土台であるということ。これを我々教育に携わる者がみんな心の中において、その上で教育活動があるということの大前提を改めて大事にしたい。

復興教育の課題としては、今年度この職について、各種研修会（初任者、5年目であるとか、校種も幼稚園、小学校、中学校の先生方）で、「復興教育って沿岸部のことを勉強する教育ではなかったのですね」という言葉が聞かれた。沿岸被災地のことを学ぶのが復興教育だと思っている教師がいた。復興教育がまだまだ伝わっていないなと思った。そのように捉えている教師の実態が教員からあったということは、かなりあるということだと思っている。復興教育は特別な教育なのではない。

令和元年度 各種研修講座で伝えている…
 「心がけたいこと」

大前提:
命。そして、大切な「あの人」のために。

- 1 目的と目標
- 2 人づくり
- 3 マネジメント
- 4 全体と部分
- 5 「当たり前」に感謝し、
 「当たり前」を疑う

スライド 2-10 命。大切な「あの人」のために。

先程も話したが、例えば桜の木が倒れたことを使って、「これは命を守ってくれた」「地域の人に来てくれた」「これで安心して歩ける」ということも復興教育の一つ。「生きていられる」「かかわり」「備えてくれた」「いきる・かかわる・そなえる」という教育的価値を伝えるチャンスなのだ。

校庭に仮設住宅があった時には、子ども達から「仮設住宅の方々がいるから私達は安心してられる、見守ってくれている」ということを学んだ。私は「あなた達すごいね。私も学んだよ」ということを伝えた。日常の生活の中に復興教育の種はたくさんあるのだということを今後教育委員会としても自分自身としても様々な場面で伝えていけたらと思っている。復興教育の教育的価値は様々な場面にあるという考え方を伝えていければなと思っている。

(3) 学校は地域と連携できる「公助」の要

麦倉哲は、東日本大震災からの教訓と大学の校安全学の成果と今後の課題について話した。

大学としては、起こったことから学問的にいろいろと学び、教育現場や地域社会の今後に生かしていくことが重要である。災害では、公共のために犠牲となった人が多い。想定を超えた津波で亡くなった人がたくさんいる。それらの検証が不可欠で、その検証の結果から得られた知見や知識を学生には身につけさせていく必要がある。

次に学校の第2のケースとして大槌町の赤浜小学校を取り上げる。この地区では約100人の人が亡くなっているが、小学校の児童は一人も亡くなっていない。地区住民のそれまでの経験では、小学校の校庭に津波が来ることはなかったという。小学校が避難所であることに疑問はなかった。しかしながら、津波校庭の高さを超えてやってきた。児童たちは先生の判断もあり、この裏山に逃げた。ことしの岩手大学の授業「いわての復興教育」でも、山へ登る経路を体験した。「これはほとんど大川小学校と同じ状況」だと、この学校の関係者は述べた。津波が来るというふうには思っていたが、防潮堤で遮られるというふうには思っていたという。それゆえ、地震がおさまると体育館で待機させた。体育館で待機をするのがマニュアルであった。しかしながら、余震が続くと「体育館は怖い」と児童たちが訴えた。その結果、再び校庭での待機となった。他方で教頭は、海面を監視をしていた。すると、津波は防潮堤を乗り越え

て寄せてきた。直後に、児童を校舎の山側に回らせ、さらに高台へと避難させた。校長は、さらに高台をめざし裏山にのぼることを指示した。体育館の中で待機していたならば、多くの児童は逃げ遅れた可能性が高い。体育館は校庭よりも1.5メートルぐらい高いところに立地していたものの、その体育館の高さにも津波が到達し、舞台の高さにも及んだのである。背の低い低学年の子どもたちは逃れようもなかった。いくつかの偶然と、さまざまな状況判断の結果、また海面を注視していたことにより、タイミングを遅らせず避難できた。

大川小学校の場合津波は、川から押し寄せてきた。その方向やタイミング、予測の方向、そういったものが結果として赤浜小学校のケースとは違っていただと思う。しかしながら、大川小学校とかなり近いケースと思われる。結果としてうまくいったではなくて、非常に危なかったケースであるということを受け継いでいく必要がある。

3つ目は吉里吉里小学校である。学校は津波で被災していないものの、地区ではやはり100人ぐらいの人が亡くなった。一人ひとりの被災行動を精査すると、犠牲となった人の約半分ぐらいの人は、自分では避難したつもりであったと推察できる。緑色のマークは避難したつもりで亡くなった人の位置。やや内側の曲線はハザードマップの境界線で、その少し外側の青色の線が実際の浸水域である。ハザードマップは科学的な分析結果を表したものだが、それによって引き出された安心感は、この地域の災害への脆弱性の一つであることを認めなければならない。科学的な知見の想定外という危険である。しかしながら、結果として学校は児童を守ったと言える。

この地区で共助が成立しにくかったケースについて考察する。地震は勤務先で勤務中に起こった、ただちに勤務先を出た女性は、自宅でおばあさん（義母）を車に乗せて、さらに保育園へ行き2人の子どもを乗せて、そして最後の到達地である吉里吉里小学校をめざしカーブを切った。そのタイミングで津波がやってきた。④（津波到達）の地点である。どこが問題点かという、避難する

途中の経路が海に向かって下がっていることである。危険な方法で避難しなければならないという問題がある。途中の保育園でとどまっておく判断はできなかったのかという点も重要な点である。避難経路の問題点等も含めて多様な角度からの検証が不可欠である。

もう一つはひきこもりのケースである。比較的安全なところにいたお父さんは、ひきこもっていた息子を助けに行った。しかしながら「出てこい」と言っても出てくるのは難しい。その結果、2人とも被災し亡くなった。これはとても難しいケースである。岩手県教育委員会は学校管理下の児童生徒を守ったという見解を表明しているが、欠席者やひきこもりなど、他のさまざまな難しいケースについて検討が不可欠である。

他の人や他のことが気になった: 避難要支援
欠席、ひきこもり、認知症等



スライド 2-11 避難要支援者 (ひきこもり)

最後は鵜住居小学校のケースである。森本先生がかつて勤務した釜石東中も鵜住居小学校も、とても真剣に防災教育に取り組んでいた。

そして3月11日の大地震が起こった後、鵜住居小学校では、いろいろと判断をしている途中で時間が経過し、とりあえず2階にいたり、3階に避難ということを考えていた。そこへ保護者で地元消防団員のひとりが来て「先生、3階避難じゃだめだよ」と厳しい口調で言った。保護者が消防団員の絆を身につけていたこともあり、その判断に従い避難を始めた。避難の途中で、東中の生徒たちと一緒にあった。しかしながら、ここも大川小学校とほとんど紙一重と思われる。こうした

ヒヤリ・ハットの度合いが高い経験をきちんと受け継いでいく必要がある。

被災前のハザードマップをみると、津波が1メートルを超えるエリアは非常に限られている。実際の浸水域とは大いに異なっている。ここに、公助の弱さが露呈している。科学を媒介にした防潮堤などなどのさまざまなハードやまちづくりの対策の結果、釜石東中や鵜住居小は、ハザード外に色分けされている。被災しないという予測である。ここも大川小学校と似たところである。

地区の中心にある防災センターは避難所ではない。国の補助を受けるために防災センターとして建設したことが混乱を助長したといえる。これも公助の陥穽である。

こうした状況で、鵜住居小学校は管理下の小学生をすべて助けたものの、保護者引き渡し後の1人と休み1人、東中では学校を休んだ1人が、被災して亡くなっている。この地区の人で犠牲となった約600人と比べると学校の取り組みの効果が発揮されたとみられるが、数少ない児童・生徒の被災死の検証も、今後の重要な課題と言える。

岩手県では高校生の被災が多いと言われている。そのようなことも検証していく必要がある。

大川小学校の遺族の方は判決の後で述べた。犠牲となった「子どもの命は本来助かる命であった」と。このことは重い言葉として受けとめる必要がある。それと同時に、自助と共助と公助の連携が不可欠である。先生ばかりに責任があるのではない。①科学の力と②地域の力と③学校の力の3つの力の連携やバランスが重要である。まず、学校の力は地域の力と連携して、いざというときの活動力の質を高めていくことが必要である。背景的にはいろんな科学の力をいろいろ応用して学ぶ必要がある。実際の例としては、森本先生や釜石東中が実際に実践したことから学ぶ点がたくさんある。科学を現実のものにして、児童・生徒が主体的に学ぶ、そして地域の伝承者や文化から学ぶようなことが必要と思われる。

しかしながら、公助とは言うけれども、科学や公助の脆弱性も明らかになった。対策の結果が、

かえって実際は危険を高めている面もある。その結果としての脆弱性を、地域社会の現場にいる人たちだけが負うというのはとても酷である。それゆえ、地域社会が脆弱な面をいかにしてバックアップするかが課題である。

学校統廃合という壁もある。これまでのところで、小学校の存続がとても重要と述べた。しかし、この国の趨勢として小学校を減らしている。地域社会から小学校を無くしてよいのだろうか。

地域に人がいないのは、過疎の現実が問題ということではない。国会議員が背負うべき重要な課題である。国土の均衡ある発展により、それぞれの地域にそれぞれのしかるべく担い手が存在できるように国土づくりをすることである。その結果が、地域力を高めていく担い手が養成されることにつながる。そうした前提の上で学校の力は、地域の力と、科学の力と連携し、求心力や遠心力を高めていくと思われる。

大槌町では、かつて7つあった小学校が6、5になり、とうとう2校になった。山田町では、現在進められている小学校統廃合により、3校になってしまう。いろいろなことなども考えた上での自助・公助・共助のそれぞれの存在感が問われる。その中で、公助が弱いじゃないかとのそしりを受けかねない事態に、一石を投じるためにも、学校防災が成立するための諸条件を引き続き精査していく必要がある。

他方で学校が存続する地域社会において、小学校等々の学校の人たちが、公助の担い手としても重要である。だからこそ、この人たちの責任は重いけれども、この人たちを支えるようなバックアップのシステムがとても必要なのだということ、研究成果に基づく提言として最後に申し述べたい。

(4) 教員養成の中で学校安全に関する基礎的な能力を身につけさせること

最後に、森本先生には、学校安全学に期待することを話した。

(シンポジスト 森本晋也調査官)

先程麦倉先生が「高校生が岩手では多く亡くなっている」というお話があったが、私は震災の後大槌町教育委員会に入った時に、鶴住居地区の合同慰霊祭に参列した。そのときにある保護者の方にお会いした。「先生、〇〇の母です」と言われて、はっと思った。卒業生で今回の震災で亡くなったと。そのお母さんは「先生方のおかげで、うちの娘は18歳という短い人生でしたが、本当にいい人生を送ることができました。中学校や高校の先生方に本当にお礼を言いたいです」というふうに言われた。

高校生はなぜ多かったか。3月11日に自宅にいたという生徒たちもいた。自宅にいた生徒たちも亡くなっている。この仕事をしていて、教え子が自分よりも先に亡くなるのはつらい。これからどんなに豊かな人生があったのだろう、これからどんな未来があったのだろうというふうに思えば思うほど、正直なところ防災教育をもっともっとやっておけばよかったとか、たとえ家にいてもどこに避難するとか、高校生、大人になってもきちっと自分の命を守れるような力を本当に身につけておけばよかった。そういう後悔はたくさんある。少しでも亡くなった生徒たちのことを未来につなげていければという思いがある。

第2次学校安全の推進に関する計画について 計画期間：平成29年4月～令和4年3月 (平成29年3月24日最終決定)

【第1次】
 ○全ての児童生徒等が、安全に関する資質・能力を身に付けることを目指す。
 ○学校管理下における児童生徒等の事故に際し、死に事故の発生原因については限りなくゼロとすることを目指すとともに、負傷・疾病の発生率については障害や偏害の負傷を伴う事故を中心に減少傾向とすることを目指す。

【第2次】
 上記を実現するために、12の推進目標を設定し、第1次計画同様、学校等が今後5年間で推進すべき具体的な取組を記載

5つの推進方針と12の推進目標

1. 学校安全に関する組織的取組の推進 ○全ての学校において、 ・管理職のリーダーシップの下、中核となる教職員を中心とした組織的な学校安全体制を構築【1】 ・学校安全対策の危機管理マニュアルの策定【2】 ・教職員の研修・検証を踏まえた改善【3】 ○全ての教職員が、各キャリアステージにおいて必要な研修等を受講【4】	4. 学校安全に関するPDCAサイクルの確立を踏んだ事故等の防止 ○全ての学校において、 ・定期的な学校施設・設備の安全点検を実施するとともに、三歳児定年の観点から通学・通園路の安全点検を行い、児童生徒等の学校生活環境を改善【5】 ・学校管理下における事故等には、「学校事故対応に関する指針」に基づき調査を実施【10】
2. 安全に関する資質の充実方策 ○全ての学校において、 ・学校教育活動全体を通じた安全教育を実施【9】 ・取組と評価・検証し、学校安全対策を改善【6】	5. 教育、地域、関係機関等との連携・協働による学校安全の推進 ○全ての学校において、 ・保護者・地域住民との連携体制を構築【11】 ・外部専門家や関係機関との連携体制を構築【12】
3. 学校の施設及び設備の整備充実 ○全ての学校において、 ・耐震化の早期完了を目指すとともに、緊急時の対応が必要な老朽化対策等を実施【7】 ・地域の特性に応じ、安全管理体制を充実【8】	

スライド 2-12 学校安全の推進に関する計画

学校保健安全法に基づいて国として取り組むべき第2次の学校安全の推進に関する計画というのを策定している。目標の第1番目は、全ての児童生徒等に安全に関する資質、能力をきちっと身に

つける。もう一つは、死亡事故の発生件数を限りなくゼロにする。けが、疾病の発生、障害を持つという事故を減少させていくこと。小中高で災害共済給付が支払われている子どもたちは、学校管理下で毎年100万件で推移している。そうすると、なぜ教訓がうまく生かされていないのか。これは国としての責務である。この子どもたちに必要な力を身に付けるのは、まさに教育である。今日の議論を踏まえても、この教育と管理をきちんと身につけた教員を育成していくというのが非常に大事だと思った。ぜひ岩手大学の学校安全学の中でも検討していただければというふうに思う。

これを実現するために、1つ目として、学校安全に関する組織的取組の推進。学校は校長先生によっても変わる。学校は、管理職のリーダーシップのもと、中核となる教職員を中心として組織的に運営していくこと。ということは、管理職が学校マネジメントの中でこの学校安全をどう取り入れていくかということも重要な問題である。そして全ての教職員がキャリアステージに応じて必要な研修を受けて力を身につける。その大前提は教職課程である。教員養成の中である程度基礎的なものを身につけた上で、後は学校に入ってからまた身につけていく必要がある。

2つ目は安全に関する教育、3つ目は施設設備、4つ目は学校安全に関するP D C Aサイクルの確立を通じた事故等の防災。そして、学校安全を学校だけではなくて、これまでも話が出ていたが、学校、家庭、地域を挙げて取り組んでいくということが国の施策としても出されている。

では、教師としてどんなふうな授業をすればよいのか。ちょうど釜石東中学校の防災教育の学校公開で、1年生のあるグループが非常持ち出し袋にどんな物を入れるかという議論をしていた。すると、お湯って書いている。普通大人が考えると、お湯なんか持っていったらどうするんだろう。そうしたら、その設定された家族構成の中に赤ちゃんが入っていた。中学校1年生ながら粉ミルクにお湯が必要だと思った。次にある子が、お湯持っていったって冷める。別の子が避難所でお湯を沸か

せるようにすればよいという。このように、自分たちで話し合っ、気付いていくことが大切。大人が簡単に答えを教えるのではなく、生徒たちに考えさせる、気付かせることが大切だと思う。

4 最後にメッセージ —子どもを守る学校、教員であるために

(1) 小野寺哲男

私がお伝えしたいことは、先程申し上げたとおり、大前提は「命」である。そして、大切なあの人のために、なのだということである。

実は高田一中勤務の1年目の4月に、盛岡市内一周継走というマラソンに高田一中の女子チームが初めて出場することになっていた。その子ども達が新聞社の取材に「私達が走ることが、家族への感謝と地域への元気を届けることになるから、初出場ですが精いっぱい頑張りたい」とコメントした。このコメントには教師の特別な指導が一切入っていないと後から知った。子ども達は保護者、教師、大人たちの背中を見ている。しっかり生きている大人がいるから、しっかり教えてくれる先生方がいるから、私達は頑張っているのだということである。

教師というのは、言葉でも背中でも伝えられる。背中で伝えられる教師になりたいなと思っている。そのために学生に求めることは今習っていること、知識、技能、思考力、判断、表現力、学びに向かう力等々あるが、知識、技能は生きて働く知識、技能である。思考、判断、表現力は未知のものに出会ったときに使える思考、判断、表現力である。学びに向かう力は、人生や社会に生かそうとする学びに向かう力である。自分自身も学び続けて一歩成長したい。今日のこの学びで私も一歩成長できたのではないかなと感じている。皆さんとともに一歩ずつ成長していきたいと思っている。

(2) 平塚真一郎

先程から、キーワードとして主体的に学ばせる

ことが大事だという話があった。では、それを指導する教員はどのようなだろう。今、教員になろうとしている学生さん達はどのようなだろう。主体的に行動できているだろうか。「自主的」とは違う。「主体的」にである。自分からいろいろアクションを起こすということができていなくて、指導すると言っても、多分それには限界があるのかなと思う。これから、いろんなことを身につけていくと思うのだけれども、まず自分の人生をしっかりと生きて、その上でいろいろな知識を身につけて、ぜひ未来の命を救う人になってほしい。

カリキュラムがなければできないのではない。どのように安全意識を高める手立てを織り込んでいくか、どうやって実施できるようにするか、その工夫が大事である。それが主体的な取組であるのだと考える。そんな取組、生き方をできたらいいと思っている。私もまだまだそういう意味では途上なので、私も頑張るのでぜひ皆さんも頑張って、日本の未来を一緒につくりましょう。

(3) 森本晋也

改めて本当に命というのは、これほど尊いものはない。自分も学校にいたときに、学校は何もないときは「安全」がどうしてもなおざりになってしまったり、今まで大丈夫だったから大丈夫だろうと思ってしまったりする。今思うと自分の部活指導などを考えると、大きな事故につながる可能性もあったというふうに反省する場面もある。

やっぱり私たちは何かを判断をするときは、これは命にかかわるのかどうかということを常に考えておく必要がある。そして、自分たちにはバイアス（思考の偏り）がかかる。正常化の偏見とか。不都合なことは、当たるとは思わない。宝くじは当たると思うけれども、自動車事故は当たるとは思わない。どうしてもバイアスがかかる。栃木の雪崩事故の事故検証委員会では、教職員の経験バイアスが指摘されていた。これまでの経験が邪魔をするということを知っているだけで、私たちは気をつけなければいけないというふうと思う。メタ認知ではないけれど、改めて思う。

そして、防災教育とか復興教育等で、やっぱり大事なのは教育の営みで、私たち教師は何のために教育に携わっているのかということ、子どもたちの豊かな人生やその将来を見据えることが大事で、そのためには子どもたちが主体的に学ぶということである。私たちはそのためにちょっと先をどう支援すればいいのか、指導すればいいのか。子どもたちの学びが促されるような指導力を身につけなければいけないのだと思う。

岩手大学「学校安全学」への期待

1 学問領域としての構築に向けて

- 子どもの生命に関わる包括的な問題を総合科学として構築
- 理論知と実践知の融合
→ 子どもの安全の確保、子どもの安全に関する資質・能力の向上へ

2 教師教育の充実にに向けて

- 教員養成課程における「学校安全学」を核としたカリキュラム・マネジメントの確立
- 現職教員に対する効果的な研修の在り方の研究や実践
→ 教員の安全に関する資質・能力の向上へ

3 地域への貢献

- 学校安全の知の拠点
- 学校・地域社会・教育委員会に対する専門的な知見
→ 地域の安全力向上へ

スライド 2-13 岩手大学「学校安全学」への期待

ぜひ学生の皆さんには、教員は、今いろいろなこつらいことばかり話題になっているが、子どもたちの人生にかかわれるすばらしい職業でもあるので、ぜひ教員を目指してほしい。未来のためにそう思っている。

(4) 麦倉 哲

私は学校の現場とか教員の役割、使命、それから専門性、そういったものも重要なだが、その背景的、構造的なものもきちんと押さえていく必要があると思う。大川小学校の裁判があり、現場の教員や自治体の教育委員会に対しては、かなり厳しい判決になった。それは「子どもたちの命は守られる命であった」という前提に立つ重要な判決だと思われる。そうだとするならば、学校が置かれている背景、脆弱性、制度的な不備、さまざまな構造的な諸問題、そういったものまで含めて仔細にさらなる検証を尽くす必要がある。防潮堤や区画整理やまちづくり、そういったところに科学

的研究の結果を応用するうえで、多様な権限者や専門家がかかわっている。これらの関係者もみな、命を守る当事者としての反省をしなければならない。

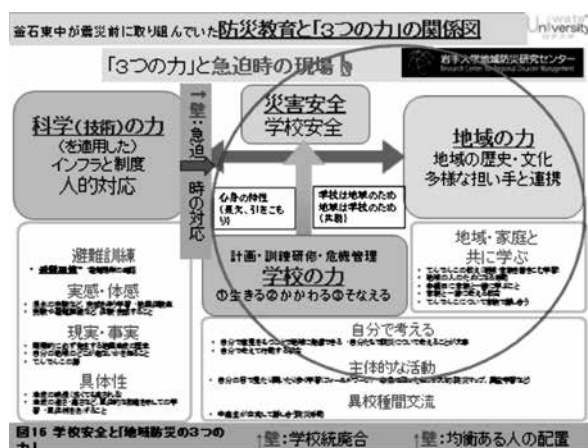


図 2-14 科学の力と地域の力と学校の力の連携

子どもたちを犠牲にしたという点で、多くの権限者が関わる背景的な構造的な問題がある。そういったものも押さえた上でなおかつ学校と地域が連携して学校安全を尽くせるようなモデルを構築していく必要がある。

岩手大学の実践授業である「いわての復興教育」では、2017年に山田町の大沢小学校、2018年に釜石東中学校、鶴住居小学校、2019年に大槌町の赤浜小学校などなど、岩手県内の多様な小学校や中学校のモデル的な取組から学んでいる。しかし一方で、統廃合の問題などもある。社会の動向にどう立ち向かうのかというような政策的、制度的な議論も、文化的なさまざまな討論もしていかなければならないし、学生たちにも考えさせたい。

(5) まとめ 加藤孔子

今日はシンポジストの皆様方のお話から、たくさんの学びをいただいた。また、第一部での学生のポスター発表の中にもたくさんのキーワードがあった。

一番のキーワードはやはり「命」だと思う。テレビで大川小学校の語り部をしている方のこんな言葉が私の心に残っている。「子どもの命を守るのは防災教育でもなければ、山でもない。山に

逃げることを教える教師の判断と行動力である」と。今、各学校では「防災教育」を学校経営の中に位置付け始めている。いや、すでに位置付けているはずである。でもそれは決して絵に描いた餅であってはならない。私も東日本大震災時には大津波が学区全体をのみこんだ学校に勤務し、様々な経験をした。その経験者として確信をもって言えることは、学校では、「防災教育」をそれぞれのステージの教師が、それぞれの立場で情熱をもって真摯に実践することが大切だということである。そのような「防災教育」がなされていたら、子どもたちの心と体に防災の知識と判断力、行動力が沁みつくと思信している。

今日のシンポジウムの2つ目のキーワードは「主体的に」だ。子どもたちが主体的に行動できるように教師自身も主体的に自然災害の知識を学び、その知識をその学校、地域に合う様々な工夫を凝らし、子どもたちに与えることである。さらに主体的な子どもたちを育むことは防災教育だけでなく、日々の教育活動全体の中で、当たり前の活動の中で当たり前のことをしっかりと育むことが前提となると思う。

東日本大震災発災後に「自然の猛威に人間の力は無力だった」という言葉を聞いたことがある。私はそうは思っていない。「人間（教師）の知恵と努力で、自然の猛威から生き抜く子どもたちを育むことができる」そう信じている。

「子どもの命を守る教師になるために」今日のシンポジウムから学んだことをもとにして、今自分たちにできること、すべきことは何なのかを考えて、これからの大学生活、1年生も、来年から教壇に立つ皆さんも、今この大学生のうちに今すべきこと、何ができるのかということを考えながら、これからの生活をしてほしい。

また、現場の先生方や一般の皆様にとっても今日のシンポジウムが自分たちにすべきことは何なのかということを考えるきっかけにしてほしい。(加藤孔子)

終章 おわりに

(1) 閉会のことば

今回のシンポジウムは前半では今岩手大学の教育学部で取り組んでいる学校安全学の授業であるとか、あるいはその学校安全学の現時点での体系についてご報告し、さらに3人の先生方、それから学部内の麦倉先生とそれぞれの立場からご意見をいただくというシンポジウムを企画したところである。

先程質疑応答の中で教育学部で、「いきる・そなえる・かかわる」についてしっかり学べていないのではないかという厳しい指摘をいただいた。教育学部4年間の教員養成のカリキュラムを、今後はしっかり学校安全学というものを基盤にしながら、それを4年間でさらに個別に学んでいくということを通して、しっかりと学校の安全、あるいは子どもたちの命を守るしっかりとした知識、技能を持った教員を育てたい。

来年の4月からは、教育学部の附属の機関として、教育実践学校安全学研究開発センターという組織を発足させる。専任の教員1名、それから学校現場に精通している客員教授も配置する。さらには兼務教員を配置して、約10名程度のスタッフで運営したい。まずは、岩手大学の一つのセンターであるが、先ほど森本調査官から提言がありましたように、行く行くは全国の学校安全にかかわる研究や実践にかかわる全国的な拠点になれるように、頑張っていきたいと思う。

最後に、きょうのシンポジウムのキーワードとして、「学校というのは子どもたちの命を預かるところである」ということをもう一度再確認をして、終わりの言葉としたい。(遠藤孝夫教育学部長)

(2) ふりかえり

2018年の第1回目のシンポジウムの時に、会場から寄せられた意見があった。大川小学校など、生徒や児童が犠牲となったことを取り上げないのかという発言である。それを受けて、そうした点も今後取り上げたいと、麦倉と森本は答えた。そして迎えた第2回目のシンポジウム、私は大川小

学校の関係者のどなたかを招きたいと思った。そして、平塚真一郎先生を招くことができた。児童・生徒の被災という点で、宮城県は岩手県よりも困難であったという話にならないように、岩手県教育委員会からは、被災から復興教育の立ち上げまでまとめあげていくという困難に立ち向かった小野寺先生をお呼びした。

麦倉は被災実態と災害検証調査をしてきたので、被災の事実や、結果として助かった背景にあるぎりぎりの状況に焦点を当てた。大川小学校を他人ごとにはしない。

そして森本調査官からは、自身の実践経験に加えて、全国の取り組みを知る専門家の立場から、数々の助言や提言を受けることとした。

会場からは期待を込めたご意見を多数頂戴した。他方で、災害安全と、交通安全、生活安全とのバランスはどうするかなどの疑問も出された。多様な意見を踏まえて、教員養成学部の今後の展望を示していけたらと思う。

最後に、本論の執筆者は、シンポジウムを記録化し編集し加筆したにすぎない。内容の創造性は、主としてシンポジスト3人のゲストによるものである。プロジェクトの事務方・裏方は廣瀬美智子主査はじめ、教育学部事務が担った。(麦倉 哲)